松下教育研究財団の実践研究助成による

学校研究「継続・発展」の手引き

はじめに　松下教育研究財団の実践研究助成による学校研究を「継続・発展」させよう！

今日，多くの教師たちが，子どもたちの学力の向上をめざして，同僚とともに授業改善に取り組んでいます。そうした学校を単位とする実践研究（以下，学校研究）を充実させるための術として，松下教育研究財団の実践研究助成があります。これを糧にして，多くの学校が授業改善やカリキュラム開発を推進してきました。しかしながら，その一方で，こうした類の実践研究を継続・発展させることの難しさが指摘されてもいます。例えば研究の推進役が異動してしまった，指定を受けたので異なるテーマで取り組まざるをえない等，学校研究を継続・発展させるための障害は少なくありません。

どうすれば，学校研究を着実に継続・発展させることができるのでしょうか。その秘訣を，この手引きでは紹介しています。まず，平成 19 年度に，2 つの小学校の研究主任に，次年度以降の実践を強く意識してもらいながら，所属校の当該年度の研究を活性化するためのアクションを繰り広げて，それを月ごとに整理してもらいました。次いで，筆者が，過去に松下教育研究財団の実践研究助成を受けた学校を訪問して，継続・発展のための工夫をヒアリングした結果をまとめて掲載しています。これらの情報は，学校研究を継続・発展させたいと考えている研究主任にとって，よき道標となるでしょう。また，最後に載せた「学校研究の評価基準」は，研究を継続・発展させるための準備状況やその推進状況を自己点検する際のツールとして有用です。さらに，コラムでは，全国の中堅教師に所属校（当時）の学校研究を盛り上げるため工夫を紹介してもらっていますので，それらもご味読ください。

なお，実践研究の企画・運営について詳しく学びたい場合には，拙著『教員が磨き合う学校研究』（ぎょうせい，2006 年）をご覧ください。また，財団の支援を受けて編者らが作成・公開している「学校研究推進に関する Q&A」（https://meru-maga.mef.or.jp/qa/qa_form.php）にアクセスしてください。

平成 20 年 3 月

「手引き」編集責任者：木原俊行（大阪教育大学・教授）

目次

はじめに----------1
1．学校研究「継続・発展」に向けたアクション例１----------2
コラム
①研究授業後の協議会を盛り上げるために----------14
②同学年の若い教師の取り組みをサポートする----------15
2．学校研究「継続・発展」に向けたアクション例２----------16
コラム
③若い研究主任を支えるための工夫----------28
④（研究主任でなくても）授業研究会を活性化するために何ができるか----------29
3．学校研究「継続・発展」の実態分析－実践研究助成校を追跡して－----------30
コラム
⑤異動したばかりの学校で実践研究推進のイニシアチブを果たす----------35
4．学校研究「継続・発展」の評価基準----------36

１．学校研究「継続・発展」に向けたアクション例１

広島県三次市立三和小学校　愛甲昌弘

（１）学校の概要

広島県三次市立三和小学校は，広島県のほぼ中央部に位置し，児童数 144 名，教職員数 13 名の小規模校である。

本校は, 平成 14 年度から 3 年間, 文部科学省の「学力向上フロンティア事業」の指定を受け, 算数科における「数学的な考え方」の育成をめざして，算数的活動の工夫や，ティーム・ティーチング指導・少人数指導など個に応じるための「きめ細かな指導」の研究に取り組んできた。

また，平成 17 年度より，広島県備北教育事務所教育実践研究校指定事業「指導方法・指導体制の工夫改善」に参加し，数学的な考え方のさらなる育成をめざし，習熟度別指導のあり方や「数学的な考え方」を評価する評価テストの作成と検証を行ってきた。その結果，学力調査では，全国平均点に対する本校の得点率が 97%から 108%に上がり，一定の成果が見られた。しかし，自ら考えを持ち，自分の考えを適切な言葉を使って，論理的に表現する力が十分身に付いていないという課題も明らかになってきた。

（２）19 年度の研究テーマ等

平成 18 年度は「数学的な考え方の育成」を研究テーマに掲げ，研究に取り組んできた。数学的な考え方を育成するための授業改善では，ねらいを明確にした算数的活動を導入することができ，また，習熟度別少人数指導やコース別指導など多様な指導形態を計画的に実施することができた。

数学的な考え方の評価のあり方についても研究を進め，数学的な考え方の定着状況を確認するためのミニテスト（評価テスト）を，全学年，全単元について作成し，評価テスト集として刊行することができた。

一方で，数学的な考え方の概念規定があいまいなまま指導や評価を行っている面があることや，評価テストの改善・精選が必要なこと等，指導・評価に関する課題も残った。また，児童の思考力を引き出すためには，思考を表現する力も同時に育てる必要があり，思考・表現を引き出す新たなアプローチの方法を模索していきたいという思いが教師たちに高まってもきた。

そこで，平成 19 年度は，**「思考力・表現力を育成する授業の創造」**を研究テーマに設定し，算数科・国語科における視聴覚機器の効果的活用を主な手だてとして，研究を進めていくこととした。

研究の視点は次の３点である。

１点目は「思考と表現の関連を図った授業づくり」である。思考したことを表現させること，また表現されたものから思考方法や思考内容のよさに気づかせ，思考をより深めることをめざした授業づくりを行っていく。

２点目は「思考力・表現力育成のための視聴覚機器の活用」である。導入，自力解決，学び合い，まとめなど，学習場面に応じて電子情報ボードやコンピュータ，学校放送番組等を活用

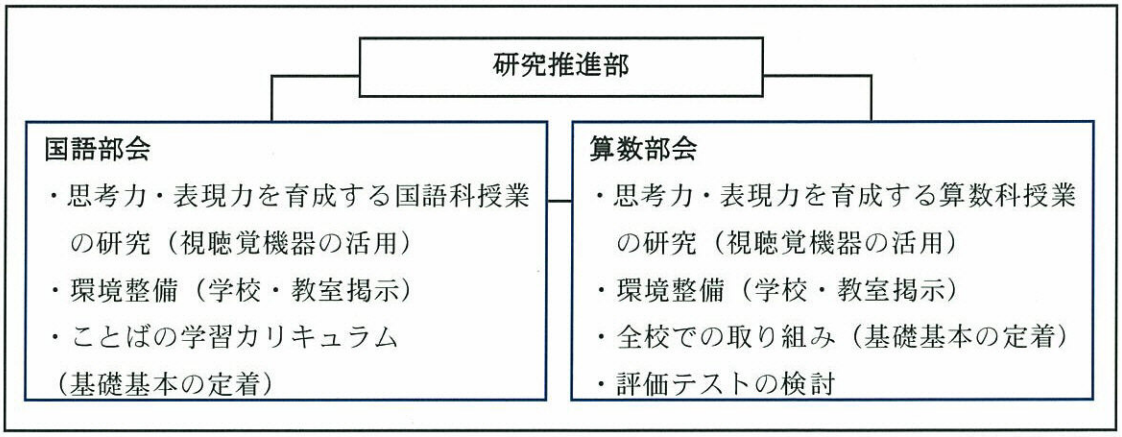
することにより，子どもたちの思考・表現を引き出したり，補ったりすることができると考えた。

３点目の視点は，「ことばの力の向上（ことばの学習）」である。思考・表現はことばを使って行われるものであることから，豊かな語彙や言語感覚，論理的表現の基礎となる言語技術といった「ことばの力」を向上させることは，思考力・表現力の向上にとって不可欠であると考えた。

研究の進め方については，まず研究組織として「国語部会」「算数部会」を立ち上げ，全員がいずれかの部会に所属するようにし，研究に主体的に参画できるようにした（下図）。

全員が見通しを持って研究実践に取り組めるよう，19 年４月に，研究主任が２年間の大まかな研究推進計画を提案した（下表）。学期ごとに研究のキーワードを設定し，授業研究会のねらいや特徴を表すことで，より研究の枠組みを教職員が確認しやすいようにした。

さらに，１年間の具体的な研修計画も立て，提案した。一人年間３回以上研究授業を実施することや，３学期には国語科と算数科の研究内容の交流を図るために，一方の研究部会のメンバーが他方の取り組みを生かして，異なる教科の研究授業を行うといった工夫をした。



（研究組織図）

年	学期	キーワード	おもな研究活動
十九年度	1 学期	知る 試す	・視聴覚機器に関する理論・実技研修 ・研究授業（講師・指導主事招聘）
	2 学期	実践する 紹介する	・研究授業（講師招聘）　・研究紀要作成 ・公開研究発表会（11 月２日　講師・指導主事招聘）
	3 学期	整理する	・研究授業（２月　講師招聘） ・１年次研究の成果と課題の整理（研究紀要加筆・製本）
二十年度	1 学期	積み上げる	・視聴覚機器活用のポイントの再確認 ・研究授業（４月・５月・６月　講師招聘）
	2 学期	広める	・研究授業（９月　講師招聘）　・研究紀要作成 ・県視聴覚研究大会（11 月 28 日　講師招聘）
	3 学期	まとめる	・研究授業（２月　講師招聘） ・研究のまとめ（研究紀要加筆・製本）

（2 年間の研究推進計画表）

（３）19 年度の研究の記録

【４月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと（継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果（左記アクションの効果）	課　題
①研究全体会の開催	○研究構想図についての協議 継続して研究する算数科と，新たに加える国語科との関連について確認した。	協議したことをもとに，構想図に改善を加えることができた。	子どもたちに付けたい力を焦点化できなかった。
	○研究推進計画の提案 ２年間を見通した研究計画を作成し，研究のプロセスを念頭に置きながら研究を推進できるようにした。	研究テーマが大きく変わったので，２年間の研究の見通しを持つことでステップを確認でき，安心感が生まれた。	研究自体の評価・検証を研究計画の中に位置づけておけば，さらに見通しをはっきりできた。
	○プレゼンテーションの実施 昨年度の研究と今年度の研究の関連性についてていねいに説明し，研究の継続性を強調した。	これまでの研究と今年度の研究の関連について説明したので，ある程度の共通理解を図れた。	時間の制約上，一方的に説明するスタイルになってしまった。
②研究部会活動のスタート	○研究部会活動計画書の作成 PDCA サイクルにもとづく研究部会運営ができるよう，研究部会活動の計画・反省・改善点を記入する用紙を作成し，研究部会長に配布した。	提出された計画書の疑問点について研究部会長と話し合い，必要な部分を修正してもらうことができた。	研究部会間で活動の方向性や計画について協議する時間を十分にはとれなかった。
③研究全体会（授業研究会）の実施	○授業提案 年度初めの授業研究会ということで，研究主任として研究内容がイメージできるよう，研究授業による実践的提案（以下，授業提案）を行った。	これからどのような授業改善に取り組んでいけばよいのか，教員間で具体的なイメージを共通理解することができた。	思考力の育成と視聴覚機器活用の接点を，授業によって明確に示すことが十分できなかった。
	○研究推進だよりの発行 研究授業の様子や事後協議会のポイント，講師の指導・助言等を整理し，研究推進だよりとして発行した。	授業研究会が終わっても研究は継続していくことを強調できた。	全員でその内容を確認する時間が取れず，配布したままになった。

【５月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと（継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果（左記アクションの効果）	課　題
①視聴覚機器の購入	○購入機器の情報収集 プロジェクターの購入に際し，機種の情報を収集し，事務に購入を依頼した。	６月の授業研究会にむけて，早い時期に機器を整備できた。	
	○電子情報ボードの購入 松下教育研究財団の助成で電子情報ボードを購入した。	インターネット上の情報（機種の特徴など）を活用し，授業で使いやすい機種を選ぶことができた。	値段が高く，１台しか購入できなかった。継続的に活用するためには台数が必要である。

②研究全体会の開催	○電子情報ボードの実技研修 研究主任が授業で使った教材を使って，電子情報ボードの実技研修を行った。	実践に近い形で研修を実施できたので，使い方や特徴などを同僚にわかりやすく伝えられた。	利用マニュアルを作成すればよかった。
	○研究についての追加説明 研究の内容や方向性について再度プレゼンテーションを行った。	４月の研究全体会で十分説明できなかった部分について追加説明を行うことができ，研究への理解を深めることができた。	研究の視点や概要は説明できたが，教科での取り組みや教科の中で付けたい思考力などについても，さらに詳しく説明できればよかった。

【６月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究全体会の開催（授業研究会の実施） 1年国語科 3年国語科	○研究部会長との協議 指導案検討の前後に研究部会長と提案する授業について協議する時間を設けた。	研究テーマと提案授業のつながりについて，ある程度共通理解を図れた。	授業提案者とじっくり相談する時間が取れず，悩みや戸惑いを十分には受けられなかった。
	○ワークショップ型協議会の実施 ３年の授業研究会では次時の授業構想を考えるワークショップ型研修を行った。	研究授業で得た成果や課題を次の実践に具体的につなげていくことができた。グループ協議を取り入れることで協議が活性化し，主体的な研修が実現した。	２つの研究授業の共通点や差異などについても協議できれば，国語科の授業改善の方向性をより明確にすることができた。
②研究全体会の開催（授業研究会の実施） 2年算数科 5年算数科	○研究部会における指導案検討・模擬授業の実施 授業者任せにならないよう指導案検討・模擬授業を実施するよう研究部会長に依頼した。	授業展開や番組活用方法などを研究部会で協議したことで，若手教員をサポートできた。	勤務時間外に研究部会を実施することになり，負担が大きくなった。
	○ワークショップ型協議会の実施 ５月に実施した標準学力調査の中から，知識を活用して解決する問題を取り上げ，研修で使用した。教員が実際に問題を解いてみた後，今，算数教育で求められている思考力とはどんな力なのか，そしてその育成のためにはいかなる授業を実践しなければならないかについてグループで協議した。	全員で問題を解いてみることで，今日育成が求められている思考力について共通理解を図れた。日々の授業で足りない部分や，さらに強めていかなければならない点を協議したことで，授業改善の視点を得ることができた。	今回は算数の問題だけだったが，国語の学力調査問題についても，今後実施する必要性を感じた。

【７月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと（継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果（左記アクションの効果）	課　題
①研究全体会の開催（授業研究会の実施）4年道徳	○若手教員による協議会の運営 主に教務主任・研究主任が行ってきた事後協議会の運営を若手教員に依頼した。協議の柱や流れ，ワークショップの内容などを共に考えながら，司会進行表を作成した。	初めての司会進行に戸惑いもあったようだが，事前準備の成果も出て活発な協議となった。	
②1 学期研究のまとめ	○授業反省レポートの様式作成と提示 授業者が１学期の授業研究をふりかえり，成果と課題をまとめるためのレポートの様式を作成し提示した。	研究の視点に即して，授業の成果と課題を整理することができた。研究紀要にそのまま掲載することで，作業の効率化を図った。	提出後すぐにチェックせず，後になって修正を依頼することになってしまった。早めのチェックが必要だった。
	○研究推進だよりの発行 ６月の授業研究で確認したことや今後の方向性について研究推進だよりにまとめ発行した。	授業研究会を単発で終わらせず，今後も継続して実践することを意識づけることができた。	内容を全員で読み合わせる時間が取れなかった。
	○研修計画の見直しと修正案の提案 夏季休業中の研修計画を見直し，今後の状況を踏まえて変更し，提案した。	研究発表会に向け，長期休業を生かし研究全体会を計画的に設定できた。	

【８月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと（継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果（左記アクションの効果）	課　題
①県外研究セミナー等への参加	○県外セミナーの情報収集と参加の割り振り 本校研究に関連するセミナー等の情報を集め，特に今後研究推進の中心になってもらいたい教員に参加を促した。	次年度以降，研究推進の中心となる予定の教員に県外研修に参加してもらうことができた。	セミナー等の情報を掲示するなど，さらに幅広く情報発信できればよかった。
②行政主催の合同研究発表会への参加	○研究発表の分担 研究主任１人で発表することが多かったが，今回の発表は４名で分担することにした。	複数の教員が研究発表に関わることができ，研究の浸透につながった。	
③研究全体会の開催	○講師との指導案相談会の実施 研究発表会で公開する授業の構想について，講師と相談する時間を設定した。	構想の段階なので，双方が気兼ねなく相談・アドバイスできた。	時間的に余裕があれば，それぞれの内容がさらに充実できた。時間配分や運営の工夫が必要であった。
	○ワークショップ型研修会の実施 学校放送番組を活用した単元プランを作成した。	ほとんどの教員が経験のない内容だったため，実りある研修にできた。	

【９月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究全体会の開催	○研究発表会準備計画の提案 研究紀要の印刷・製本，分科会準備，会場設営などの準備計画を提案するとともに，公開する授業と使用機器について調整した。	教科，機器活用，個に応じた指導など本校での取り組みを網羅した授業が公開できるよう調整できた。	管理職とは協議したが，教務部会で計画について協議・確認する時間をとれなかった。
②研究紀要の作成	○研究紀要構成の工夫 研究の全体構想と，算数科・国語科の研究構想の関連性が明確になるよう「研究の全体構想」「算数科研究実践」「国語科研究実践」「成果と課題」という構成にした。	算数科・国語科の部分は各研究部会で執筆してもらった。多くの教員が紀要作成に携わることができ，研究内容の浸透が図れた。	当初の予定より原稿作成がかなり遅れた。また，全体構想と教科の構想のズレがあり，修正に手間取った。
③授業研究会に向けての準備	○研究部会単位での授業準備 研究部会長と連携し，研究部会単位で授業研究会に向けた指導案検討会・模擬授業を実施し，発問や学習活動，機器活用のあり方などについて研究部会で協議してもらうようにした。	掲示や教具なども協力して準備し，研究部会全員が研究テーマを意識できた。それが事後検討会での協議の深まりにあらわれた。	勤務時間内に研究部会活動の時間が取れず，負担をかけてしまった。
	○模擬授業への参加 両研究部会の模擬授業に参加し，準備の進捗状況や研究部会での意見交流などを把握した。	授業研究会の前に，授業者の意図や手だてを詳しく知ることができ，協議会運営に役立った。	
④研究全体会の開催（授業研究会の実施） 3年国語科 5年算数科	○授業観察カードの作成 研究テーマに沿った観点について，３段階の数値評価，気づき，改善策を記入する授業観察カードを作成し，事前に配布した。記入したカードを事後協議会で活用した。	事前にカードを配布することで，授業者には自らの授業の最終チェックに役立ち，参観者には参観の視点を持ってもらえた。	毎回協議会の内容や形式が違うので，授業観察カードなど，統一して実施するものを定めたい。

【10月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①公開研究発表会に向けての準備	○提案授業についての相談 指導案の修正で悩んでいる教員をみつけ，機器の活用の仕方等についてアドバイスした。	説明的文章の読解における視聴覚機器活用方法をいくつか提案することができた。	もっと多くの教員とコミュニケーションをとり，相談にのればよかった。
	○研究発表会における分科会運営の工夫 算数科ではポスターセッション，国語科ではワークショップ型協議会を実施するよう計画した。	授業者と参加者が活発に意見交流できるよう，分会会の企画・運営を工夫できた。	自分が所属していない国語部会の分科会の運営に，十分には関わることができなかった。

②研究紀要原稿の確認	○研究紀要の内容説明 研究の全体構想，算数科・国語科の研究構想の原稿が完成したので，研究発表会を前に，全員で内容の再確認する機会を設けた。	研究のポイントを確認してもらうとともに，自分の授業と研究構想にズレがないかをチェックしてもらった。	研究紀要原稿の作成が遅れたため，内容確認の時期も遅れてしまった。

【11 月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①公開研究発表会の開催	○研究発表会プログラムの工夫 授業公開前に研究発表をすること，分科会にポスターセッションやワークショップを取り入れること，分科会後に全体交流の場を設定することなど，プログラムを工夫した。	参加者に本校研究の全体像を把握してもらうことができ，授業や研究の方向性についても多くの意見をもらうことができた。	事前の準備や打ち合わせが重要だが，研究紀要作成や研究発表の用意などが遅れ，それらが十分には準備できなかった。
	○研究発表の工夫 発表の構成を「研究全体の概要」「今日の公開授業のポイント（算数・国語）」「分科会の内容と進め方」とし，研究内容だけでなく，研究発表会の全体像がわかるよう工夫した。	参加者に研究内容と授業のつながりを把握してもらうことで，授業参観の視点を持ってもらうことができた。	保護者向けの説明の工夫，スクリーンの大きさ，画面の文字の大きさなど，細かい配慮が十分できていなかった。
	○分科会運営の工夫 算数分科会ではポスターセッション形式，国語分科会ではワークショップ形式の分科会を実施した。分科会終了後には，両分科会の様子や協議のポイントを交流する時間を設定した。	ポスターセッションは，参加者と授業者が活発に議論を交わすことができた。ポスターによって授業のポイントを把握してもらいやすくなり，議論が活性化した。	準備が遅れ，国語分科会の進行表を事前に確認することができなかった。算数分科会のポスター作成も直前になり，準備が大変だった。
②研究発表会の反省	○反省の効率化 研究部会での反省点をカードに記入し，それをプロジェクターで投影しながら全体で交流した。	研究発表会後すぐに研究部会での反省を交流でき，研究会で得た成果や課題を効率的に共有できた。	
	○研究発表会授業反省レポートの様式作成・提示 研究発表会の成果と課題を以後の実践につなげていくため，公開授業のまとめを作成・提出してもらった。	記憶が新鮮なうちに授業のまとめができた。研究発表会が終わっても，研究を継続していくことを意識づけた。	提出後すぐに原稿をチェックできず訂正の依頼が遅くなり，迷惑をかけた。
③予算獲得の準備	○機器購入リストの作成 教務主任が研究助成に応募することを提案し，購入する機器のリストを作成するため，インターネット上で必要な機器の情報を集めた。	調べてみるといくつかの研究助成や視聴覚機器のモニター制度などがあることがわかった。	

【12 月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①県視聴覚教育研究大会への参加	○次年度研究発表会プログラムについての協議 研究発表会参加後，校長と何度か次年度の研究大会のプログラムや分科会の形式，研究紀要の内容等について話し合った。	参加型の研究発表会をめざすという意見で一致し，次年度の研究発表会の分科会にポスターセッションを取り入れることなど確認できた。	校長だけでなく，教務部のメンバーとも研究発表会プログラムについて協議する必要があった。
②教務部会の開催	○次年度研究構想についてのヒアリング 教務部会を開催し，今年度の研究推進で難しかった点や次年度の研究構想についての意見などをヒアリングした。	早い時期に次年度研究構想についてヒアリングできたので，１月に提出する松下教育研究財団の実践研究助成申請書にもそれを活かすことができた。	教務主任が長期研修で不在だったため，具体的な話し合いには至らなかった。再度部会を開催することにした。
③2 学期研究部会活動のまとめ	○２学期研究部会活動の反省と３学期活動計画の提出依頼 年間計画にもとづき，２学期の研究部会活動をふりかえり，３学期の計画を協議するよう研究部会長に依頼した。	学期ごとに活動をふりかえり，成果と課題をまとめ，それをもとに次の計画を立てるというサイクルが定着できた。	提出されたまとめをチェックするのがいつも遅くなってしまう。今後の大きな課題として意識したい。

【１月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①実践レポートの作成	○実践レポート蓄積の依頼 実践レポートを次年度研究大会で配布する実践事例集に活用できるよう，写真や吹き出しをつけるなど工夫して作成するよう依頼した。	レポート作成を義務づけることにより，それぞれの教員が自分なりに研究内容を消化し，実践することを促すことができた。	レポート作成に悩んでいた教員へのサポートが十分ではなかった。
②研究全体会の開催（授業研究会の実施） １年国語科 算数科 ６年国語科	○研究授業にむけての準備 研究部会での指導案検討会・模擬授業の日程を計画した。また，指導講師と提案授業の内容や事後協議会の内容・形式について連携した。	研究部会のメンバー全員で，別の部会の研究活動をふりかえったり，そのポイントを再確認したりする機会を設けることで，研究内容の交流を促すことができた。	事前に研究部会間交流の時間を用意できず，両研究部会のこれまでの研究の積み上げを生かしきるまでには至らなかった。
	○研究教科を交換した授業研究会の実施 算数部会が国語科の授業を国語部会が算数科の授業を行うようにした。	教科を交換して授業提案に取り組むことで，校内での研究内容の交流を活発にし，理解の促進を図ることができた。	提案授業が３本あり，それぞれについて詳しく検討する時間が取れなかった。

	○協議会運営の工夫 事後協議会では国語・算数グループに分かれ，授業感想を書いた付箋を「指導の工夫」「児童の姿」といった観点で区切られた模造紙上に貼り付けながら，指導の工夫と児童の思考力・表現力向上との関連性について協議した。その後全体協議を行った。	教務主任のアイデアで，指導と児童の思考・表現の関連性を座標に表すという方法を試み，協議の活性化につながった。	来年度の方向性について協議する時間が短く，今年度最後の授業研究会の位置づけとしてはやや物足りなさがあった。
③松下教育財団の実践研究助成への申請	○次年度への研究の継続・発展を意図した研究推進計画の立案 授業改善の取り組みに加え，校内での研究内容の交流・活性化，外部評価の積極的な導入など，研究の継続・発展のための取り組みを研究推進の柱に据え，研究推進計画を立てた。	実践レポートの蓄積や研究発表会の開催，授業研究会運営の工夫など，研究の継続・発展のための具体的な手だてを，この時期に構想しておくことで，次年度の研究推進について明確な見通しを持つことができた。	申請内容について全員でじっくりと確認する時間が得取れなかったため，来月以降に実施することにした。

【２月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①今年度の研究部会活動の総括	○研究部会活動交流会の計画 各研究部会の活動のまとめと次年度への引継ぎを兼ねた研修会を 3 月に実施することを計画し，研究部会長に準備を依頼した。	研究部会長や部会員がそれぞれの活動をふりかえりながら，次年度の研究について具体的に考える機会を設けることができた。	
②総合的な学習年間指導計画の見直し	○新学習指導要領の情報提供 学習指導要領の改定に伴い，総合的な学習の時間がどう変わるのかについて，資料を集め，配布した。	新学習指導要領への移行を意識した指導計画の見直しが図れた。	
③ことばの教育年間指導計画の見直し・訂正	○教務部会での事前協議 ことばの学習の一層の充実を図るため，次年度の「ことばの教育年間指導計画」の内容や各学年の指導計画表の形式等について，教務部で事前に協議した。	次年度研究と深く関連する指導計画なので，担当者任せにせず，教務部会でじっくりと協議し，次年度のことばの学習のカリキュラムの土台を作ることができた。	各学年の指導計画まで立てる予定だったが，全体計画の見直しに時間がかかったためできなかった。

【３月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究部会活動交流会の実施	○次年度への研究の継続を意図した研修の実施 今年度の成果と課題を確実に次年度に継承するために，国語科・算数科の授業の「基本スタイル」について再確認できる研修を実施した。	両研究部会ともプレゼンテーションやワークショップを取り入れ，工夫を凝らした研修を企画した。今年度の取り組みと，次年度の授業改善の方向性を提案してもらうことで，研究の継続・発展を図ることができた。	企画を研究部会にほぼ任せていたので，もう少し関わる時間を作り，押さえるべきポイントを確認しておけばよかった。
②次年度研究推進計画についての協議	○ワークショップ型協議会の実施 児童のよい面，課題，研究推進についての成果や難しかった面を，付箋紙に記入し，模造紙に貼り付けた。	次年度の研究推進計画を作成する前に，もう一度児童の実態を見直し，研究の方向性について考えることができた。	全体協議をもっと早い時期にできればよかったのだが時間的に難しかった。
	○若手教員活躍の場の提供 次年度研究推進に携わってもらう予定の若手教員に，成果と課題の整理を依頼した。模造紙に張られた意見をグループごとに整理し，共通点や特徴などを発表してもらった。	児童実態や，研究の成果と課題をまとめる作業を通して研究への理解を深めるとともに，協議会運営の経験を持ってもらうことができた。	打ち合わせもなしに突然やってもらったので，本人にとっては大変だったと思う。
③教務部会の開催	○研究の方向性についての再協議 前回の研究全体会で作成した模造紙を教務部会で再度見直してもらい，研究の方向性について再度協議した。その際，国語科・算数科の学力調査や単元テストの資料を配布した。	学力テスト等の具体的資料も参考にしながら，児童実態の課題を整理し，次年度に重視する思考力・表現力の内実について協議することができた。	研究構想図や研修計画など，具体的な内容を協議する時間までは確保できず，次年度に持ち越しになった。
④1年間の研究の総括	○研究紀要追加分の印刷・製本 研究発表会授業反省，１月授業研究会のまとめ，3 学期実践レポート，研究部会総括，研究の検証の原稿を仕上げ，印刷し，11 月に作成した研究紀要に追加した。	研究発表会以後の研究の取り組みを整理でき，また，１年間の学校研究の総括ができた。	年度末に内容を確認する時間を取れなかった。４月に実施する次年度研究推進についての研修でしっかりと活用していきたい。

（４）研究の継続・発展に向けてのアクションで大切にしたいこと

研究主任として取り組んだことから，特に研究の継続・発展に効果的であった事例を整理すると，以下の４点にまとめることができる。

①教職員個々の参加の促進

一部の教員の個人プレーに頼っていては，研究が年度をまたいで継続・発展することは難しい。教職員一人ひとりが研究に主体的に参画することが，研究の継続・発展の大きな要因である。そのためには個々の教職員の，研究への参加度を高める手だてが必要である。

例えば３学期に実施した実践レポートの作成がそれにあたる。実践レポートを作成することにより，これまでの研究のポイントを各自がふりかえり，どのように実践に活かせばよいかを考える機会を作り出すことができた。

また，新年度に入り，新しいメンバーにこれまでの研究の様子を紹介するときにも，このレポートが大いに役立つ。研究の概要を説明した後，実践レポートを実践者本人が説明する時間を作り，研究の様子をより具体的に把握してもらうことができた。また，実践者も，実践報告をすることにより，自身の実践のよさや課題を再確認できた。

毎回の研究授業後に行う事後協議会も，個々の参加度を高める大きな機会となりうる。今年度はワークショップ型協議会を積極的に取り入れた。例えば，９月の授業研究会では，授業についての協議をもとに，次時の授業案を作成する活動に取り組んだ。他にも，学校放送番組を活用した単元構想案の作成，ポスターセッションなどを実施した。それらの活動の企画・運営は大変だが，質疑・応答・まとめを繰り返すだけの授業研究会とは比較できないほど，個々の参加度を高められた。

研修会の企画の工夫とともに，それを進行する司会の役割も大きい。建設的な議論を進めるためには，司会がうまく舵取りをしなければならない。発言の無い人を指名したり，発言が長すぎる場合には途中で切ったりすることも必要である。個々の意見をまとめ，研究の視点と関連づけながら授業改善のポイントを整理するのも,重要な役割である。そのためには，指導案をチェックし，授業者の意図や思いを把握しておくこと，授業参観時に他の教職員の様子を把握しておくこと，協議で予想される意見を想定し司会進行表を作成することなど，事前の準備が大切である。今年度は協議会の運営を研究主任や教務主任が行うことがほとんどだったので，次年度は研究推進部のメンバーで運営の仕事を分担し，さらに多くの教員がそうしたスキルを獲得し，研究にさらに積極的に参加できる体制を整えたいと考える。

②研究テーマ・内容の連続性・発展性の保障

研究の継続・発展には，研究テーマ・内容が連続性を持っていることが必要である。さらにその連続性を，研究主任はもちろんのこと，全教職員が共通理解しているとさらに研究の発展を期待できる。

そのために研究主任は，研究内容や成果・課題を，年度が変わる前に整理し，新年度のスタート時点で全教職員にわかりやすく伝えることが大切である。

それを実践したのが，４月の研究全体会でのプレゼンテーションである。今年度の研究推

進の概要，方向性を提案する前に，前年度の研究の構想，実践，成果と課題などを説明することで，研究の連続性を確認することができた。なお，プレゼンテーションには文章だけでなく，実践の写真や学力テストのグラフなど，具体的な資料を組み合わせるなどの工夫も大切である。年度末の３月には，１年間の研究の成果と課題を整理し，研究紀要を作成した。本校のように，すでに研究紀要を作成している学校であれば，研究発表会以後の授業研究会の報告，年度末の児童の実態，研究の総括などの内容を追加し，別冊（追加分）として印刷しておくと，次年度４月の研究概要のプレゼンテーションの資料にも使えて重宝する。

このように節目ごとに成果と課題をまとめ，次への改善を考えるためには，研究計画にPDCA サイクルを組み込んでおくことが大切である。本校では，研究部会で学期ごとの活動を評価・改善する流れを作ることができ，それが研究の継続・発展を促す基盤となった。

③研究の条件整備

本校のように視聴覚機器の活用を研究の柱に据えているような場合は特に，環境整備の充実が，研究の発展には欠かせない。今年度は，松下教育研究財団の実践研究助成を受けることで，電子情報ボード，プロジェクター等を購入し，ICT 環境の整備が進んだ。環境が整うことで教職員の研究意欲が高まり，それは実践の広がりと深まりを促した。

またこの実践研究助成には，助成申請書の提出はもちろんだが，助成申請が決まった後にも，計画書，中間報告書，成果報告書の提出が義務づけられている。助成申請書の提出は１月末で，これは通常の学校研究サイクルよりずいぶん早い時期である。この時期に，これまでの研究の成果と課題を整理し，次年度の研究計画を立てることにより，残りの２ヶ月を使って次年度にむけた準備や協議を計画的に実施することができた。５月の計画書は，前年度に立てた研究推進計画の見直しと改善に，10 月の中間報告書は，研究発表会で配布する研究紀要の原稿作成に，３月の成果報告書は，年度末の研究紀要改訂の原稿に，それぞれ活用することができた。このように，松下教育研究助成は機器の条件整備にとどまらず，学校研究全体を活性化する枠組みを提供してくれたといえる。

④形成的評価の実施

研究に対する外部評価を積極的・計画的に取り入れ，研究を形成的に評価を実施することも，研究を活性化させ，充実・発展させるためのポイントであろう。

今年度は全ての授業研究会に，大学講師や指導主事を招聘した。11 月の公開研究発表会では，授業公開前に研究発表を行って授業を参観する視点を明示した上で，分科会での参加型協議やアンケートの実施などにより，参加者からできるだけ多くの意見をもらえるように，プログラムを工夫した。また１月の授業研究会では，近隣の小学校から視聴覚教育を専門とする教員を招き，意見をもらうこともできた。

加えて，４月と２月の全校学力調査（算数科・国語科），年２回の保護者アンケート，年３回の児童実態調査（話す力・書く力）も，研究の形成的評価に役立った。

コラム①　研究授業後の協議会を盛り上げるために

丹波市立西小学校　細見隆昭

１　念入りな準備が協議会を成功させる

本校では，研究授業後の協議会では，教師全員に高い参加意識を持ってもらうために，ワークショップ形式を採用しています。その内容は「図１　協議会の流れ」のとおりです。

協議会を成功させるために，司会者は事前の準備をしっかり行う必要があります。まず，指導案を一読し，授業者がどのような提案をしたいのかを把握します。不明な点はあらかじめ確認します。そして，授業内容と研究テーマに適した講師を選定し，打ち合わせします。さらに，協議会で深めたい討議の柱を設定し，それに対する各教師の意見を予想します。予定時間内に終了できるよう，時間配分も工夫します。ワークショップに必要な付箋，模造紙やマジックなどの消耗品も準備します。

１　開会
２　授業者の反省（5 分）
３　質疑応答（3 分）
○ワークショップ開始（60 分）
４　授業のよい点・改善点
５　グループで協議・整理
６　グループ発表
７　協議を深める
８　講師の指導助言(30 分)
９　閉会

図 1　協議会の流れ

２　ワークショップを進める司会者の役割

実際のワークショップでは，参加者に５人前後のグループになってもらいます。そのときに，教職経験年数に偏りがないよう配慮します。

まず，個人が授業の「よい点」「改善点」をそれぞれ違う色の付箋紙に書き出します。時間は少なめがよいでしょう。一人５つぐらい書き出したところで，次の作業に移ります。たくさん書き出し過ぎると,それを分類整理するのにさらに時間が必要になってしまうからです。

次に，グループごとに司会者を決め，個人が書き出した付箋をもとに話し合い，マジックで見出しをつけて意見を整理してもらいます。ワークショップ形式にすると，どの教師も意見を出せますし，それに対する同僚からのコメントも瞬時に得られます。これは，協議会に対する教師の参加意識を高め，同時に満足感を得るために有功な手だてです。

そして，グループごとに意見を短く発表してもらいます。司会者はそれぞれのグループで協議された内容と，事前に用意していた討議の柱を照らし合わせ，参加者がもっと話し合いたいと望んでいるテーマを設定します。さらに，そのテーマにそって話し合いを進めます。また,「板書は児童の思考を整理できるように書く」「明確な発問を準備する」など，授業に対する改善案が出された場合は，逆に，参加者に普段の授業でそれを実施できているのか振り返ってもらうことも可能です。いずれにせよ，一人ひとりの教師の思いを出し合い，話し合いがこれからの授業づくりに役立てられるものになるよう，司会者は努力します。

最後に，講師から専門的な指導助言をいただきます。講師は「みなさん，たくさん意見を出され，もう話すことはないのだけれど・・・」と言いながらも，これまでの実践を振り返り，研究の方向性を具体的に示唆されることでしょう。

研究授業後の協議会を盛り上げるためには，ワークショップ形式を採り入れ，一人ひとりの教師の参加意識を高めることが一番有効であると考えます。

コラム②　同学年等の若い教師の取り組みをサポートする

千代田区立九段小学校　竹下佳余

学校研究で大切なことは，主題にそって子どもたちの学力を確実に向上させること，そのための授業改善を日々の授業の中で意図的計画的に行うことです。しかし，現実には，研究主題が充分に理解されず，「どこに向かって何をすればよいか」分からないまま研究を進めていることは，意外に多いのではないでしょうか。そして，決して時間的に余裕があると言えない教育現場で，教材研究や研修に追われる若い教師の胸の内は，おそらく次のようなものだろうと考えられます。

〇研究授業にふさわしい授業ができるだろうか。

〇何から始めたらよいのだろうか。指導案が書けるだろうか。

〇研究授業では何を見ればよいのだろう，協議会では何を言えばよいのだろう。

「研究授業」の実施自体が目的になってしまって，それ自身が「良かったのか・悪かったのか」の評価はしても，その授業が１年間の指導の中でどのような意味があったのかを考えることはあまりありません。そこで，少し経験の多い者として，若い教師の不安を取り除いたり，充実感の得られる研究を進めたりする手助けはできないかと考えてみました。

サポートの内容

年度当初のオリエンテーション	←〇研究のゴール（研究発表の授業：子どもに身に付けさせたい力）を共通理解する
分科会研究授業Ⅰ	←〇指導案の形式の確認　〇研究主題に沿った提案点の整理 〇提案点を踏まえた協議会の工夫（ワークショップ形式）
分科会研究授業Ⅱ （若手教員の授業）	←〇研究授業Ⅰで協議されたことに焦点を当てて，授業設計をする
研究発表会の準備	←〇見通しがもてるようスケジュール表を作る
１．単元開発	←〇ＫＪ法で，それぞれの授業のイメージを出し合い，単元計画を立てる　＊専科や養護教諭にも参加してもらう
２．教材研究	←〇試作品をみんなで作る　〇試作品に関する資料を集める
３．仕事分担	←【指導案関係】①ねらい・評価規準②単元計画③単元構想④本時案 【発表プレゼン】【掲示物】【教材・教具】【印刷・製本】　一人一役
４．授業の充実	←〇互いの授業を参観し合う　〇進度の確認　〇模擬授業

（下線は，こちらが，リーダーシップをとって進めた内容）

若い教員から「ヘルプのサイン」が出たら素早く対応し，じっくり相談にのって一緒に作業を進めます。先導的にならないよう注意し，「主役はあなたです」というメッセージを送り続けることがポイントです。時間を割くことは簡単なことではありませんが，「自己の責任を果たさなくては」という気持ちに必ずなってくれると思います。

２．学校研究「継続・発展」に向けたアクション例２

目黒区立田道小学校　田端芳恵

（１）学校の概要

目黒区立田道小学校は，JR 目黒駅及び恵比寿駅に隣接した住宅地の中にあり，平成 20 年度に開校 75 周年を迎える。児童数は 295 名（3/25 現在）である。学級数は，５学年を除いて各学年２学級の計 11 学級である。校長以下 26 名の教職員をもって指導にあたっている。

（２）平成 19 年度の研究テーマ等

本校が学校研究で取り組んできたことをまとめると以下のようになる。

平成９年度～12 年度は, 目黒区教育委員会の研究奨励校の指定を受け,「共に楽しく学び, 生活に生きる算数科の研究」に取り組んできた。平成 13 年度～16 年度は，かかわる力・伝え合う力・振り返る力の３つの力の育成をめざして,「総合的な学習の時間」のカリキュラム開発を主柱とする研究に取り組んできた。

そして平成 17 年度以降は, 伝え合う力の育成をめざして, 国語科を中心に研究を進めた。特に平成 18・19 年度目黒区教育委員会教育開発指定校として，国語科と読書活動のかかわりの中で国語力を育てる研究に取り組み，その成果を発表することになった。

平成 19 年度の研究主題は,「豊かな心を育む授業の創造～読みの力を付け，読書の楽しみを広げる～」であった。本校の重点教育目標である「心豊かで思いやりのある子」の育成をめざし，国語の学習指導と読書活動を取り上げ，地域や家庭との連携を図りながら研究を推進することで，豊かに感じ，考え，創造する力を身に付けさせることができるのではないかと考えた。

具体的には，国語の授業においては，一人一人の国語力を一層向上させるために，国語学習と読書活動をどのようにかかわらせていくべきか，授業を中心に考えあっていく必要があった。また，サブテーマにかかげている「読みの力」について共通理解し，定義を明確にしていく必要もある。読書においては，子どもたちに読ませたい本を揃えるために，公共図書館と連携して図書の充実を図りたいと考えた。さらに, 図書室利用教育をすすめるために「読書活動の手引き」を作成し，子どもたちに日常の読書活動でそれを活用させたいと思った。日常的な読書活動の充実に向けて家庭との連携等にも取り組むことにした。

さて，平成 19 年度の研究は，大きく２つのステップに分けて行うことにした。前期（４月～７月）には，研究計画の策定，研究構想及び研究主題に迫るための手だての明確化，研究発表会の諸準備等に，時間を割いた。具体的な研究活動としては，授業研究会を４回実施するとともに，全学級の授業公開を行った。７月には，目黒区研究開発校として，授業の公開とそれを題材とする協議会，読書に関する講演から成る研究発表会を実施した。

後期（９月～３月）には，研究発表会での成果と課題を受けて，研究を深めるため新たな課題を設定し，３回の授業研究を行った。さらに，前期に引き続き，児童を対象とするアンケートを実施することによって，子どもたちの読解力・読書力の伸びを分析し，その後の実践に生かした。年度の終わりには，１年間の研究を振り返り，その成果と課題を確認するこ

とで，次年度の研究に向けての橋渡しを行った。

ところで，同僚が研究主任に期待したことは次の３つであった。１つ目は研究がどのように進み，どのようなゴールをめざしているのかを分かりやすく示してほしいということである。具体的には，研究内容の体系化，理論的な構成，わかりやすい文書の作成方法，国語の授業の在り方等である。２つ目は，研究にかかわる様々な疑問にわかりやすく答え，実践においても牽引役となってほしいということである。３つ目は，研究を進める上で，同僚や外部人材に関して，それぞれの立場や考えを尊重しつつ相互の調整を図ってほしいというものである。

（３）19 年度の研究の記録

【４月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究推進委員会の開催 ・昨年度の振り返り ・４月の全体会の内容確認	○昨年度の研究活動の振り返りと今年度の研究方針の確認 昨年度の研究活動についてまとめたものをプレゼンテーションし，研究全体会に向けて研究方針を確認した。また，まとめたものを「研推だより」に載せた。	研究推進委員会の１年間の活動と役割を確認することができた。	今年度転入してきた教員に昨年度の研究活動について個別に説明する時間が必要であった。
②研究全体会の開催 ・研究構想図等の検討 ・研究のねらいについての共通理解 ・年間計画の確認等	○研究内容の提示 昨年度からの研究の継続性について説明するため，分かりやすいプレゼンテーションを行い，全教員が今年度の研究活動を見通せるようにした。 ○協議会の持ち方についての提案 ワークショップ形式の協議会の手引きを配布し，説明した。	新しく入った教員と共にこれまでの研究活動を振り返って今年度の研究活動について考え合うことができた。 全員の意見が生かされる協議会の持ち方・研究活動について検討することができた。	「読みの力」のとらえ方についての共通理解に時間がかかった。
③個人研究計画の作成	○個人研究計画作成についての提案 研究推進委員会において個人研究計画を立てて研究を継続してもらうことを説明した。プランの様式を「研推だより」にて示した。	研究主題の具現化に向け，全員参加の活動のスタートを切ることができた。	作成に戸惑っている教員には声かけを行う必要があった。
④部会活動の企画・運営	○部会活動の運営の促進 部会のリーダーと仕事内容を検討し，活動計画シートを作成した。そうした立場には今後研究推進を担っていってほしい若手も起用した。	研究発表に向けての具体的な日程や各部会での必要な取り組みについてきめ細かく確認することができた。	発表会までの具体的な検討内容がたくさんあったが，時間を十分には確保できなかった。

⑤研究全体会（第１・２回授業研究会）の開催	○課題を受けた授業研究の提案 昨年度の課題であった，研究の視点の１つである「個の読みを深める」の育成にかかわった授業提案になるよう，授業者と早い段階から指導案の内容等を検討した。	研究発表会における公開授業ではこれまでの研究活動の成果を示すため，同一単元に関する，国語と読書活動の２つの授業を行うことが決まった。	教務主任と日程を相談し，全体会の時間を確保する必要があった。

【５月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究推進委員会の開催 ・研究構想図の作成と「読みの力」についての検討	○「読みの力」についての提案 研究構想図のたたき台と，先月の全体会での話し合いを受けて,「読みの力」のとらえ方についてまとめた文書を作成した。	昨年度から検討していた「読みの力」について,本校の定義づけを明確に文書化することができた。	発表会に向けた具体的な図式化は，研究主任が原案を作成し，研究推進委員会で検討することとなった。
②国語と読書に関する児童の意識・実態アンケートの分析と考察	○分析シートの作成と資料の提示 研究発表会までの時間が少ないため，早めの提案を担当に促した。また，分析・考察について部会ごとに記入するシートを作成した。その際,前年度の資料を提示し，比較検討することで，昨年度の研究内容への理解を促した。	児童の変容から研究活動の深まりを確認し,実践を見直したり,昨年度の研究内容を理解したりすることにつながった。発表会の資料としても役立った。	児童用アンケートの項目について改善ポイントが明らかになったが,前年度等の結果と比較検討するために，それを十分には反映できなかった。
③研究全体会（第３回授業研究会）の開催	○研究発表会の指導案の提案 昨年度からの指導案を生かし，研究発表会で公開する授業の指導案の様式を提案し，その項目等を担当者と検討した。研究授業の担当者にはそれに即して，指導案を作成してもらった。	研究の視点を分かりやすく示すために,研究推進委員を始め,全教員で検討することができた。	原案作成の際,内容項目の検討に時間を要した。負担が偏ってしまった。
④研究発表会の準備・案内の作成 ・研究リーフレット作成 ・読書の手引き作成 ・資料集の作成（CD-R）	○研究発表会一次案内の作成 研究発表会当日に配布する原稿を検討し，区へ第１稿を提出した。 ○年間計画修正についての提案 それぞれの学年で年間計画を修正する際，その観点を理解しやすいよう，研究主任が自分の学年を先行して作成し，全体に提案した。 ○資料の提供 初めて研究発表会を経験する教員が多いため，他校の紀要や資料集，最終案内等を提示した。	写真や図で分かりやすく簡潔に提示したリーフレットを作成できた。学年部会や専門部会の連携により,作業が円滑に進んだ。 研究主任として,年間計画にかかわって同僚の相談にのることができた。	リーフレットとCD-R の基本構想をたて，資料を集めるのが日程的にきつくなった。

【６月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究推進委員会の開催 ・研究発表会に関する内容の検討	○研究概要プレゼンの作成 研究発表会における研究概要のプレゼンテーションの原案を作成した。発表は２つの分科会で行うため，研究推進委員会で共通する項目，焦点化する項目を検討した。また，発表する部会毎に作成したプレゼンを検討した。	これまでの研究活動において検討を重ねてきた，読解と読書活動の関わりをどう示すかを全教員で検討することができた。	時間がなかったため，プレゼンは研究主任がほぼ作成した。そのため，検討の結果を後日（校正時）に反映せざるをえない状況に陥った。
②部会活動の運営 ・発表会に向けた校内環境の整備 ・学習資料の作成	○部会のリーダーとの連携 研究発表会に向け，研究活動を分かりやすく示すための手だてについて部会のリーダーと綿密な打ち合わせを行い，詳細な計画を立てた。	部会の責任者がリーダーシップをとり発表内容の取りまとめを行った。それぞれの教員が得意な分野で力を発揮する場面が見られた。	研究活動の様子を「研推だより」に載せるようにしていたが，各自の実践をもっと紹介する内容があるとよかった。
③研究発表会の準備	○電子黒板に関する企業への依頼 電子黒板の活用，デジタル教科書の活用を企業等の協力のもと行うこととした。	活用に向けた研修会を企業の方と行い，読解の学習に生かせた。	各学年がいつでも活用できるように，デジタル教科書の購入を依頼した。
④研究全体会（第４回授業研究会）の開催	○提案授業への相談 授業者と学年部会による指導案検討が計画通り進まなかったため，研究の視点に沿って授業を組み立てられるよう個別にアドバイスした。	研究全体会で明らかになったことを，授業の進め方や具体的な手だて等実践に生かす姿が見られた。	研究発表に向けて研究推進委員会が早めのサポートを行っていく必要を確認した。
⑤当日指導案と研究発表内容の検討	○講師・区との連絡調整 年間指導講師と連絡を取り，研究発表会で公開する授業の指導案について，指導を受けられるようにした。 ○指導案の検討 管理職・主幹とともに各学年の指導案を検討し，修正点を個別に説明した。	当日指導案は，講師や区，管理職からの指導によって修正を重ね，研究の視点を明確にしたものとなった。	提出が遅い学年もあったため，発表会までのスケジュールを「研推だより」で改めて示した。また，１週間毎の予定を掲示した。

【７月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究発表会の開催 ・発表会の準備 ・配布物・掲示物の確認 ・講師との連絡 ・研推だよりの発行 ・企業との連携	○部会のリーダーとの連携 ６月から７月にかけては各部会のリーダーを集めて短い話し合いを積み重ね，活動の確認をとるようにした。 ○研推だよりの発行 発表会までの準備をスムーズに行えるよう「今日の活動」を明記したたよりをほぼ毎日発行した。 ○企業への協力依頼 読解学習に活用するため，電子黒板の追加貸与を依頼した。 ○指導講師との連絡・調整 発表会前に講師と連絡を取り，授業のねらいや分科会・全体会のもち方など，当日の流れを説明した。また当日配布する資料を事前に送付し，指導を仰いだ。	少人数のため，適宜打ち合わせができ，効率よく活動を進めることができた。 「今日の活動」を全員が確認できた。 電子黒板の借用により２つの学年でデジタル教科書を活用した授業を公開することができた。 学習の経過を示す掲示物を作成しようと各学年が工夫して作業に取り組んだ。模擬授業に取り組む姿もあった。	当日は分科会での意見が少なかった。声かけの仕方や方法そのものを見直す必要があった。 発表会当日しか来て頂けなかった講師には，直接こちらの研究内容を説明できなかったので，反省が残った。 講演が延びてしまったが，講演内容は好評であった。
②研究推進委員会の開催 ・研究発表会の反省	○発表会の振り返り 発表会後，熱が冷めないうちに，公開授業や分科会の様子を報告し合った。各部会にて成果と課題を出し合い，今後の研究活動について検討するよう，依頼した。 ○指導講師への連絡 発表会後，研究主任として校長と共にお礼状を送付した。	研究推進委員のそれぞれの授業の報告から，研究の視点に沿って研究発表会を通した成果と課題を検討することができた。	
③研究発表会の成果と課題の確認	○成果と課題のまとめの作成 全職員から集めた反省を取りまとめ，発表会の成果と課題として全体で確認した。 ○今後の研究日程の検討 教務主任と打ち合わせを行い，全体会等の日程を確定した。	発表会後の反省を全員に書いてもらうことができた。	全授業の実際と研究の成果と課題を明らかにした上で，課題をどのように実践で検証していくのかを考える必要がある。

【８月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究推進委員会の開催	○個人振り返りシートの作成 研究発表会振り返りシートの原案（個人）を作成した。	記入したカードを一覧にまとめることで，公開授業の実際を把握することができた。	外部評価などの必要性を感じた。

②部会活動の推進 ・成果と課題の検討 ・実践の交流	○部会毎の振り返りシートの作成 研究発表会振り返りシートの原案（各部会）を作成した。	部会ごとに話し合いをもち，具体的な場面から成果と課題を洗い出すことができた。	校舎改修工事のため各部会の話し合いをもつことが難しかった。
③校外での研究セミナー等への参加	○研究活動の発展・夏季研修会での情報収集，若手同僚への働きかけ 本校の研究に関わって，夏の研修会の情報を「研推だより」に載せ，意欲的に参加してもらえるよう声をかけた。また，情報交換を行えるよう資料の提出をお願いした。	次年度の研究推進委員会のメンバーにしたい教員をセミナー等に誘い，研究活動について話をすることができた。	お願いしたレポートを取りまとめるのが遅くなった。
④研究全体会の持ち方の検討	○個人研究計画修正についての相談 個人研究計画修正の提出が遅れている同僚には個別に働きかけた。特に専科教員は，研究主題に照らして作成する旨を個別に説明した。 ○次年度の研究活動についての検討 管理職及び主幹と研究発表での成果と課題や今後の研究活動（次年度以降も含め）について話し合った。	７月までの研究活動を踏まえた修正ができた。 次年度の研究は継続という校長の方針を把握できた。	９月の全体会では，これまでの振り返りを踏まえた９月以降の研究計画を一人一人発表することとした。

【９月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究推進委員会の開催 ・研究全体会の具体的な内容の検討	○講師との連絡・調整 今後の研究全体会（授業研究）の日程を調整した。講師から今後の方向性について，読解力を高めることに重点を置いた授業を展開してほしいという話があった。そこで，「研推だより」にて報告し，各学年部会での授業の構想の際，それに留意するよう説明した。	校長から今後の研究に対する基本的な考えが事前に出された。そこで，今年度の成果と課題を踏まえ次年度の研究方針及び計画を練っていく事を研究推進委員会でスムーズに確認することができた。	次年度どのように発展させ，深めていくのか具体的な方策を考えていく必要がある。
②研究全体会の開催 ・個人研究計画の発表 ・今後の研究活動について	○今後の個人研究計画の中間報告 研究の継続・発展をねらって個人研究をそれぞれが発表することにした。その具体的方法について質問があり個別に対応した。また，全員が発表できるよう各研究推進委員にもサポートをお願いした。文書での提出を行い，印刷して配布した。	報告では全教員がていねいに説明を行った。焦点化した話し合いができるよう，研究の視点に沿った柱立てを行い，質疑応答や板書の工夫等によって，協議が活発に行われた。	校長から授業改善に向けて ICT の活用が十分なされていない事が話された。今後の研究活動で見直していくことを確認した。

③研究推進委員会の開催による研究全体会のフォロー	○今後の研究の方向性の提案 研究全体会で話し合ったことをまとめ，今後の研究の方向性を提案した。また，外部講師から，研究発表会後の研究活動の進め方（授業及び研究推進委員会の役割）に対する指導をいただいた。	次年度研究活動の中心的存在にと期待している先生に快く授業を公開してもらった。授業の構想から相談にのり，具体的な手だてを話し合うことができた。	研究活動を広報するホームページ作成が進んでいない事を反省した。今後に向けて担当を決め，具体的な内容を話し合った。

【10 月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究推進委員会の開催 ・研修会の内容検討 ・指導案検討	○読書活動に関わる研修会の実施 校舎工事により延期した研修会を実施した。講師と連絡をとり，今後の読書活動に生かせるようにした。 ○授業提案へのアドバイス 研究発表会の成果と課題を受けた授業提案がなされるよう各部会に働きかけた。	年度当初から職員が希望していた研修会の開催が実現した。実際に本を紹介できて，充実した会となった。 読解力の育成に向けた授業提案をするよう向かったのがよかった。	期末の忙しい時であったので，ブックトークに向けて本探しをするのが大変という声も聞かれた。研修会の日程について，次年度に生かす。
②研究全体会（授業研究会）の開催	○課題を受けた授業研究の提案 個の読みを深める・集団で読みを深めるに重点を置いた授業を行った。	読解力の育成について今後の具体的な手だてを協議した。また，ノート指導やワークシートの在り方についても活動や発達段階，個に応じて考えていくことが話し合われた。	部会で十分な検討がなされないまま，全体での事前検討会で提案されてしまった。また，提案授業がこれまでの活動や９月の話し合いに即していない部分が多く，そのデザインの修正が必要となった。
③部会活動の運営	○部会のリーダーとの連携 研究発表会の成果と課題を受けて，活動内容を検討していくため，リーダーと話し合いをもった。また，部会だよりを出してもらえるようお願いした。	部会だよりで活動内容が報告され，日常の研究活動の見通しが示されたことにより，全教員が意識して実践に臨むことにつながった。	

【11 月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究推進委員会の開催 ・前回の全体会の反省	○研究全体会の振り返り 研究全体会で明らかになったことをまとめ，今後の提案授業の方向性について協議した。委員会での話を「研推だより」に載せ，振り返れるようにした。	授業を通して明らかになった成果と課題を研究推進委員会で確認することができた。次の研究授業の提案内容を考えるもととすることができた。	
②学年部会の開催 ・指導案の検討	○提案授業に向けた協議と授業者へのフォロー 提案授業の担当者が同学年の教員であったので，課題を解決すべく学習の進め方やワークシートの作成などを，共同で，詳細に検討し，単元計画を作成した。 学年部会の日程を早めに設定し，指導案検討を行った。また，授業者に対して個別のサポートを行った。	授業を見合い，各授業の修正点を次時に生かすことを重ねて，指導案の事前検討を行った。 読解学習の中で読書がさらに効果を発揮できるよう新たな試みを提案することにつながった。	10 月の授業研究の際，組織だった指導案検討ができなかったことを反省し，確認しながら進めることができたが，授業提案の内容が難しいという声も聞こえてきた。
③研究活動の交流	○研究活動の紹介 本校研究活動の視察に際して，教務主任と共に計画を立てた。授業提案者や説明する担当者の準備も考慮し，早めに職員会議で提案，説明した。相手先校には早めに計画を一覧にして送った。 視察者に対し，読解力の育成をめざした授業を全教員が行い，主任から研究内容の説明を行った。	国語の授業を全教員が公開することができた。国語と読書のかかわりについてさらに深く考え合うことができた。 研究活動の実際を説明することで，研究内容をまとめなおすことができた。	
④次年度の研究方針の検討	○次年度の研究方針についての検討 次年度の学校研究について校長から個人的に説明があった。それまでの研究の成果と課題を踏まえて，研究主任の立場から，それに意見を申し述べた。	今年度の研究をまとめる方向で進むことが分かった。また，次年度研究推進委員会を取りまとめるリーダーについて，意見を述べた。	他の研究活動の話も上がってきていたため，どのように重点を置いて取り組むのか教員の中に疑問が残った。

【12 月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究推進委員会の開催 ・前回の全体会の反省	○研究全体会の振り返り 研究全体会で特に課題となったことを中心に協議し，具体的な方策を検討した。委員会での話を「研推だより」に載せ，全教員が振り返れるようにした。 ○研究全体会のもち方の提案 次回の研究全体会で今年度の反省と次年度に向けた話し合いをワークショップ型で行うことを提案した。	授業を通して明らかになった成果と課題を研究推進委員会で確認することができた。次の研究授業を通した提案の内容を考えるもととすることができた。	授業提案で取り入れた読書活動の手だてを次年度以降の研究活動にどのように生かしていくかが課題となった。
②指導案の検討	○指導案作成時における講師への連絡 指導案検討が計画的に行われるよう日程を早めに提示し，連日協議を行って修正を重ねた。そのため指導講師に検討中の指導案を２回送り指導を受けた。 ○授業提案への相談 学年部会協議への参加，授業者に対して個別のサポートを行った。	指導案の事前検討を綿密に行うことができた。 電子黒板の活用や集団による読みの深まりについて検証する提案となった。	授業の構想や内容がなかなか出来上がらなかったため，結果的に，授業者は指導案を何度も書き直すこととなった。
③研究集録の作成	○研究集録作成にあたっての提案 研究集録のプロットを提案した。研究推進委員会の意見を反映するために，あえて粗いものを示した。発表会後の実践をどう進めたかを報告するため，発表会当日のものとその後の実践の２本立てとした。	まとめをどのように行うかという方針自体から，話し合うことができた。	特に部会のリーダーの負担が大きいなど，執筆分担に個人差ができてしまった。
④他校の研究発表会への参加	○研究発表会での情報収集 本校研究活動に関わる研究発表会への参加を呼びかけた。そのため「研推だより」で研究発表校の紹介を行ったり，参加した教員の報告を載せたりして，研究をさらに発展させられるよう働きかけた。	各自が責任をもって参観した学校の研究内容を報告した。本校の研究に生かせることを授業及び日常の活動の両面から検討することができた。	時間的・予算的に，全教員が参加することは難しかった。

【１月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究推進委員会の開催 ・研究全体会の持ち方の検討	○研究全体会の持ち方の提案 今年度の成果と課題について話し合うことを提案した。	特に研究発表会後の実践の深まりに留意して全体会で話し合うよう，共通理解することができた。	全体会の流れは時間も少なかったため，研究主任がほとんど提案することになった。

②学年部会の開催 ・今年度の成果と課題についての確認	○部会活動の運営 部会のリーダーと相談した上で，協議する事柄を整理し，「研推だより」で知らせた。 ○研究発表会後の実践の振り返り 児童の変容，手だてで明らかになったこと，成果と課題が年間を通したまとめとなっているかどうか等，各部会で検討するよう提案した。	各部会では，具体的な取り組みの様子，児童の変容を振り返りながら，成果と課題について活発な話し合いが行われた。次年度の取り組みを考え合うことができた。	部会ごとに時間を設定してもらったため，まとめまでに時間が延びてしまった。
③研究集録作成の準備	○集録作成にあたっての再提案 実践のまとめ方についての詳細を「研推だより」に載せ，知らせた。 研究発表会での公開授業とその後の実践のまとめ方については，研究内容の深まりを考え，細部を変更した。	研推だよりや朝会などで期日を示したり，様式を提示したりしたので，昨年度より締切を守ってくれる方が多かった。	視点にそって書きにくいという声も聞かれたので，個別に対応した。
④研究全体会の開催 ・今年度の反省	○研究全体会についての事前提案 当日の進行と各自の役割について共通理解してもらうよう文書にて提案した。 ○校長，司会役の教員との打ち合わせ 校長，司会役の教員と打ち合わせを行い，当日の流れを確認した。 ○全体会に向けた資料の掲示 これまでの全体会で出された意見や話し合いによって明らかになったことを整理して提示した。	今年度の成果と課題について全教員に成果と課題を書いてもらった。それを全体としてまとめ，確認することができた。これはワークショップ型の協議会を継続して行ってきたことで，個々が参加意識をしっかりともって研究活動に取り組めた成果である。	全体で協議をする中，議論が盛り上がり，予定した時間より大幅に伸びた。そこで２月に次年度に向けた話し合いをすることと，全体会の話し合いを研推でまとめて提案するということを確認した。

【２月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究推進委員会の開催	○研究全体会の振り返り 記録のノートをもとに，改めて成果と課題を確認した。 ○次年度研究の方針の検討 前回の研究全体会を受けて次年度どのように進めるかを提案し，検討した。	研究推進委員会としてのまとまりのある話し合いをもつことができ，方向性の定まった提案を立てることができた。	
②部会活動の運営	○児童用アンケートの実施 担当に対し，その内容等を早めに提案するよう声をかけた。 ○「読書活動の手引き」の作成 次年度の「読書の手引き」の構成等について検討するよう提案した。	学校評価にも国語や読書活動の内容が書かれることが増えた。 担当が責任をもって早めに対応してくれた。	アンケートのとりまとめがやはり遅れているので，担当の方が困っていることを全体の場でお願いした。

③研究全体会の開催 ・研究方針・研究主題・研究内容についての検討	○次年度の研究方針の提案 前回の研究全体会での協議内容を生かした，研究の方針について，その原案を示した。 ○研究構想図を活用した提案 次年度の研究主題・内容等について話し合うため，研究構想図を基に考え合うことを提案した。各学年部会毎に検討し，代表者が発表した。それを取りまとめ全体で協議した。	大学教授に研究全体会を参観してもらい，今後の研究活動に向けた助言をいただいた。今年度の研究に関する具体的なコメントを喜ぶ教員が多かった。	研究活動を進める上で課題となっている「書くこと・書く力」を重視する声が聞かれた。

【３月の学校研究】

学校研究の活動内容	研究主任として工夫したこと （継続・発展に特に重要となるアクション）	成　果 （左記アクションの効果）	課　題
①研究推進委員会の開催 ・次年度の研究計画の検討	○次年度の研究内容及び年間計画の提案 前回の研究全体会を振り返り，次年度研究の方針を確認した上で，研究主任から，その内容や計画を提案し，委員会で検討した。	記録を見ながら，研究推進委員それぞれの考えを出し合うことで，より研究推進委員会としての考えをまとめられるようにできたのがよかった。	
②研究全体会の開催	○次年度の研究活動の共通理解 次年度の研究内容，年間計画について具体的に提案した。 ○各自の実践報告 １年間を振り返り，研究に関わる実践報告を行った。	今年度の研究を継続し，深化させていくことを共通理解できた。 各自の実践から学ぶことができた。	時程の変更があり，各自の実践について報告する時間を取ることができなかったので，紙面発表とした。
③研究報告書の作成 ・研究活動の報告	○研究集録の取りまとめ及び発送 ○研究報告文書の作成 研究開発校としての研究活動を文書にて報告した。 ○学習資料の集約の提案 教材に関わる資料やワークシート等を次年度の取り組みにおいて生かし，さらに発展させていくこととした。	どの実践も研究主題や研究の視点に沿ったまとめを行うことができた。次年度以降の研究活動の資料となった。また，各学年で作成した資料を取りまとめ次年度以降に生かすこととなった。	次年度はさらに実践に生かせる研究紀要の作成が望まれる。

（４）研究の継続・発展に向けてのアクションで大切にしたいこと

今年度，学校研究の継続・発展のために研究主任として自分なりに努力してきた。その中でも特に工夫したことは以下の通りである。

①教職員個々の参加の促進

学校研究を継続・発展させるためには，個々の研究活動に対する参加意識を高めることが重要である。そこで，学校研究主題に基づき，個人研究計画を全教員が策定するよう働きか

けた。そのことにより，日々の国語の授業実践に対する取り組みがより積極的になった。また，分科会での話し合いがより具体的な子どもの変容をもとに行われ，研究内容を深めることにつながった。この個人研究を継続させることをねらって，研究全体会での中間発表，年度末の報告会を行った。この取り組みによって多くの教員が主体的に研究活動に取り組む姿が見られた。

さらに，ワークショップ形式の協議会を行うことで，個々の教員が積極的に発言し，共通理解を図りながら研究内容を深めることができた。協議会を行うにあたって，研究主任として会の持ち方, 進め方の手引きや参観の視点を提示したことで, 焦点化された議論が行われ, 課題が深まる形で研究を進めることができた。その上，研究推進委員による司会進行は持ち回りで行ったので，若手の教員も回を追うごとにスムーズな進行ができるようになった。

②次なるリーダーの育成

次年度以降の学校研究の継続のために，学年部会等の責任者を研究副主任に位置づけ，研究主任とともに，所属する部会のとりまとめだけでなく，本校の研究活動全体を見渡す視点をもってもらうようにした。特に次なるリーダーとして期待している教員には，研究全体会での司会進行を任せたり，話し合いのまとめをしてもらったり，すすんで授業提案をしてもらったりした。そのことによって，本人の研究活動に対する意識に高まりが見られた。

③研究テーマ・内容の連続性・発展性の保障

研究発表会の終了後, 研究の継続と一層の深化を求めて, 成果と課題について各学年部会・各専門部会・全体会で綿密に検討し，研究のねらいをより高く設定したうえで３回の授業研究会を行った。授業研究会では，発表会で他校から寄せられた意見や講師からの指導助言を生かして授業計画を組み立て，実践で検証した。

年度末には, 研究発表会以降に取り組んだことを通して深まったことが明らかになるよう, 研究集録を作成した。

④研究情報・ツールの共有化

研究活動の円滑な進行のために「研推だより」（年間 35 号）を発行した。「研推だより」には，研究推進委員会からの提案，各部会からの活動状況の報告，実践の様子，全体会のまとめ，成果と課題，他校の研究活動情報などを記載した。「研推だより」によって，他の分科会の活動が目に見えたり，研究推進委員会の考えや進め方などについて共通理解が進んだりした。さらに，全体会での成果が「研推だより」によって蓄積された。

また，各部会からも「部会だより」によって各部会の取り組みがより具体的に示された。さらに，職員室内に研究コーナーを設置し，そこにおける掲示等で，研究活動がいっそう具体的に見えるようにして，研究に対する意識の高揚と継続を図った。

コラム③　若い研究主任を支えるための工夫

高槻市立阿武山小学校　浅香一世

2007 年度４月, 守口市から高槻市に異動して, 阿武山小学校に勤務することになりました。本校は児童数が 1000 名を超えるマンモス校です。職員数も 50 名を超えています。その上, 2007 年度は全教職員の３分の１ほどが入れ替わったため, 研究主任も教職経験２年目の若手が担当することになりました。自分の２年目を振り返ると，クラスのことを考えるのに手一杯でしたから，同じ状況にあると思われる若手研究主任を積極的にサポートすることにしました。

今年度の研究テーマを彼にたずねてみると，「書く力の育成」と「校内 LAN の活用」の２つだと答えてくれました。「書く力の育成」について昨年度までどのような研究をしてきたかと質問してみると，以前が「話す力の育成」だったから，今年度は「書く力の育成」になったという答えが返ってきました。また，「校内 LAN」については，前年度に高槻市教育委員会から委嘱されて「校内 LAN の活用」を研究していたのでその継続だと言われました。これだけでは，めざす子ども像が見えないし，この２つが同時並行で研究が深まるだろうかと疑問に思いました。そんな時に，NHK から，「文部科学省先導的教育情報化プログラム」たる「テレビ番組と ICT の連動による探求型学習の効果に関する調査研究」に参加してみないかと誘われました。私が率先して，管理職に相談したり，教職員の意向を把握したりして，学校としてこの取り組みに参加することになりました。同時に，校内 LAN を発展させ，先導的プログラムを主柱に据えて研究しようと研究主任に提案しました。それによって，研究テーマは，「校内 LAN を活用したわかる授業・楽しい授業の創造」と整理されました。

その後も，全教職員に，子どもにつけたい力を明確しようと訴えたり，それに即した模擬授業の実施をコーディネートしたりしました。また，自らが研究授業を実施し，実際にどのように授業を展開し，子どもとやり取りをしているのかを見てもらう機会を設けたりもしました。さらに，講師についても，知り合いの大学の先生や NHK の方と連絡を取り，学校に招聘する段取りをつけました。

１月になり，今年度の反省と次年度の研究テーマを考える時期が来ました。若手の研究主任がこれについて相談に来たので，それに対して，２月の研究授業後の協議会では本校の子どもにつけたい力をワークショップ形式で出し合い，その結果を踏まえて，研究部で検討しようと提案しました。実際に検討する時もサポート役に回って，話をまとめる手助けをしました。その結果，研究テーマは，「思考力・表現力を鍛える ICT 活用」と定まりました。

研究主任を含めた若手教員には，前述した先導的プログラムの報告会（東京）への参加を促し，他の学校がどのように研究しているかを実際に見てもらうように，計らいました。他の学校の実践報告を聞くことで多くの刺激を受けたようでした。

若手の研究主任は一年間どのように研究を進めていったらよいのかがわからなくて悩んでいました。可能な限り助言をしてきましたが，来年度は研究主任をさせてもらいたいと，今は考えています。一方，若手の研究主任には推進委員になってもらい，研究推進の仕方を学んでもらいたいと願っています。

コラム④　研究主任でなくても，授業研究会を活性化するために何ができるか

総社市立清音小学校　藤原亜紀子

本校の 19 年度の研究主題は，「『伝え合う力』を身につけた清音っ子の育成～『書く』活動を生かして「話す・聞く」ことの力を育てる指導の在り方～」でした。また，研究の対象教科は国語でした。私は研究推進委員会には属さない立場でしたが，授業研究会を活性化するために，自分なりに取り組んできました。それを以下に述べたいと思います。

〇授業公開

私は， 19 年度，講師を招聘する研究全体会での授業公開を進んで引き受けました。研究授業を自ら望んで引き受ける教員は，そう多くはいません。けれども，私は，授業公開は勉強になることが多いので，自分自身の授業の腕を磨くために，なるべく，多くの方に批評してもらえるチャンスである，研究全体会で授業を公開しようと心がけています。

〇研究部会や研究全体会における積極的な発言

19 年度特に心がけたのは, 研究部会や研究全体会における, 指導案の事前検討会において, あらかじめ配布された指導案をしっかり読み，質問を１つ以上考えておくことでした。授業者の説明を聞き，感じたことや質問を述べることで，授業者だけに任せるのではなく，みんなで学校研究にかかわっていこうという意識がもてるようになりました。

また，19 年度の研究主任が研修報告会を計画的に入れてくれたので，夏休み中に受けた国語科の研修を詳しくまとめて報告し，勉強したことを同僚に紹介することも試みました。

〇研究主任とのかかわり

19 年度の目標として，特に研究主任との関わりを多くしようと決めていましたが，18 年度の研究主任が 19 年度は同学年の主任，18 年度の同学年の主任が 19 年度の研究主任という状況だったので，そうした立場の人たちと授業や研究の進め方について気軽に話すことができました。また，勉強したい単元の授業について話をしたところ，研究主任が快く授業を見せてくれました。その際に，次年度の研究の方向性についてインスピレーションがわき，職員室でその授業のことを話題に出しました。研究に対する話し合いがざっくばらんにできたのもよかったように思います。

〇専門部会における役割

18 年度に引き続き，私は授業研究部会に所属しました。今年度の目標は，研究全体会で授業を公開する教師の相談に乗り，共同で授業を創造していくことでした。学年部会のメンバーだけで指導案を検討するのではなく，他の学年の教師も集まって授業について話し合うことにより，学年の系統性を考えて授業を組み立てたり，いろいろな視点から授業の流れを考えたりすることができました。

〇初任者とのかかわり

18 年度も 19 年度も初任者が続けて本校に赴任してきたので，彼らと学級経営や授業について話す機会を多くもつことを心がけました。学校研究の活性化を図るには，若い力も必要なので，互いに研究への取り組みを啓発しあえたことはよかったように思います。

３．学校研究「継続・発展」の実態分析－過年度の実践研究助成校を追跡して－

大阪教育大学　木原俊行

筆者は，学校研究の継続・発展のあり方，それを支え，促す要因を明らかにするために，平成 19 年９～11 月にかけて，松下教育研究財団の平成 18 年度実践研究助成を受けた学校を訪問し，授業見学や聞き取り調査を実施した。

ある学校は，残念ながら，研究活動が停滞していた。それは，18 年度の実践研究が計画どおりに遂行されていないことが原因であった。また，研究活動が一部の教師によって進められていたため，異動によってそれらの教師が転出してしまうと研究のノウハウや成果が継承されにくかったようであった。

一方，助成を受けた経験を自校の実践研究の継続・発展に役立てている学校もあった。授業実践や研究活動が広がりや深まりを見せている学校の様子，そのために教師たちがこうじている工夫等を以下にレポートする。

（１）ケース１：学校研究継続・発展のモデルケース（H 中学校）

地方中核都市の H 中学校を９月に訪問した。この学校は，14 学級，教職員数 30 名強の中規模の学校である。第２学年の情報教育の実践を見学させてもらった。また，放課後，教頭や研究主任等に，学校の取り組みについて，インタビューした。

後述するように，この学校における実践研究の継続･発展には，様々な要因が働いている。いわば，学校研究継続・発展のモデルケースと言えよう。

①18 年度の研究の概要

18 年度，同校では，放送番組等の映像メディアの活用に，全教職員が取り組んだ。10 月には，全クラスの授業を公開する形で，研究発表会を催している。1 年間の取り組みによって，映像メディアの教育効果を再確認するとともに，それを教科等の年間指導計画に位置づけることができた。

地上デジタルテレビ放送等に関する，２つのプロジェクトを組織化したり，大学や保護者との連携を図ったりして，学校研究の企画・運営も工夫している。

②19 年度の研究活動

H 中学校では，平成 19 年４月に，７名の教員が異動してきた。一般には，それは研究の継続・発展を難しくするが，H 中学校の教師たちは，学校として組織的に，また継続して，映像メディアの教育利用に取り組んでいた。実際，訪問時にも，NHK 学校放送の情報教育番組を第２学年の全クラスで利用していた。

研究テーマは，「自ら学び自ら行動する生徒の育成－『かかわり』の中に自己価値を活かす学びのあり方」と定められている。教師たちは，18 年度までは学力向上を標榜して「個に応じた指導」に取り組んでいたが，それとバランスを取りたい，つまり集団で考えるよさを生徒に味わわせたいと願い，このテーマを設定したそうである。

同校の実践の特徴は，この「バランス」にある。例えば，他にも，全国放送の番組とローカル放送の番組の併用，デジタルとアナログの融合等も図っていた。

11 月に授業研究会を開催するが，その前に，各教科の教科内交流の機会も定めることにしていた。そして，それらは外部からも参加可能であり，学校ホームページで案内するとのことであった。

③研究の継続・発展とその要因

中学校では，一般に，教科の壁が高く，それをまたいで，学校として組織的に研究活動を企画・運営するのは容易ではない。しかしながら，H 中学校では，それが実現し，そして，上述したような形で継続している。以下にリストアップしたのは，同校における実践研究の継続・発展を成立させる要因の代表的なものであろう。

・全教員が映像メディアの利用に取り組めるように，資料や機材の整備を進めている**（環境の整備）**。

・それを担当する教員がきめ細かく同僚に対応している。彼は，誰かが質問したり，依頼したりしたら，自分の仕事を後回しにしてでも，それに応じてくれる。**（サポーターの存在）**

・新任教師にも，あえて役割を与えて，研究活動に参画させている。例えば，学年合同授業の指導案を作成してもらうなど。それが，教育メディアの活用は「誰でも簡単にできるんだよ」ということを（他の教員等に）理解してもらうことに資する。**（若手教師の活躍）**

・教科間の壁を取る。研究授業は２つの教科のものを組み合わせて企画するが，あえて，いわゆる５教科と実技教科の組み合わせを設定している。また，教科間の共通理解を図るために，指導案の形式をそろえている。**（共通の枠組みの設定）**

・前年度と実践内容は変わらないけれども，前年度のプロジェクト制は廃止するなど，研究組織をあえて改編している。**（研究組織の積極的改編）**

・H 中学校の実践研究の計画は，実に緻密である。５月に催された校内研修会の資料は，50 頁を越えている。その内容も，過年度の実践研究との関連，19 年度の研修日程，教科・領域ごとの具体的課題や年間指導計画など，きわめて充実している。特に，教科等の年間指導計画に，映像メディアの利用が記されている点が重要であろう。その作業を通じて，取り組みの連続性を誰もが考えざるを得なくなるからだ。同時に，それを年度途中の「研究活動の形成的評価」に利用できるからだ。**（緻密な計画策定）**

H 中学校の事例として紹介した，学校研究継続・発展の要因，例えば「環境の整備」や「サポーターの存在」等は，実は，他の学校の取り組みにも確認される。

それゆえ，以下では，３つの学校における実践研究の継続・発展の特徴的な部分に焦点をあててレポートする。

（２）ケース２：実践研究の方法論の継承（C 小学校）

C 小学校は，郡部に位置する，８学級の小さな学校である。教職員数も 20 名に至らないが，とても研究熱心な学校だ。毎年のように，研究指定を受け，教育課題の克服に教師たちが腐心している。同校を９月に訪問し，第６学年の算数の授業を見学するとともに，学校長や研究主任等に学校研究の実態についてインタビューを実施した。

①18 年度の研究の概要

C 小学校の 18 年度の研究の柱は，「数学的な考え方の育成」であった。それを支援するための「個別学習プログラムの開発」に教師たちは勤しんだ。放課後等の教師がいない状況でも子どもたちが算数学習に着手することをめざしたが，必ずしも，その理念を体現したプログラムができたわけではない。むしろ，一斉指導における問題提示や問題解決のプロセスのモデル化に，開発したプログラムが役立ったそうである。

プログラムの開発は，基本的には，研究主任が担当した。ただし，夏期研修等で研究の進捗状況を全員に伝える，授業研究会を実施して開発したプログラムを同僚に評価してもらう

機会を設ける,作成したパワーポイントのコンテンツをCDにして各教員に配布するといった取り組みに着手し，普及を心がけたそうである。さらに，町の教員で構成している，自主研修サークルにてC小学校で開発したプログラムを紹介し,メンバーにも作成したCDを配布した。

②19年度の研究活動

平成19年度のC中学校の研究主題は,「確かな『読む力』を育み，国語力を高めるにはどうしたらよいか」と定められ，18年度のものとは趣を異にしている。必ずしも，子どもたちがプログラムを活用しているわけでもない。環境も整っていない（町長が替わって，環境整備がストップしている)。

しかし，教師たちは，国語力の育成からスタートして，後には算数指導の工夫改善にもチャレンジしたいと述べた。また，プログラム開発時にその重要性を理解した「教材研究」，それに基づく授業力の向上をめざしているという点で，研究は連続・発展していると考えている，それゆえ文部科学省の「国語力向上モデル事業」の実践校にも応募したのだと語った。

さらに，18年度の助成研究への取り組みを通じて，授業改善に関する教職員間の対話が豊かになり，それは現在も続いているとも述べていた。

③研究の継続・発展とその要因

C 小学校の学校研究の継続・発展は，必ずしも直線的なものではない。例えば対象とする教科や育成を図る学力が異なるため，18 年度の研究の成果を 19 年度の取り組みに直接活かしているわけではない。

しかしながら，**実践研究の方法論は，確実に継承されていた**。まず，同校の教師たちは，実践研究における形成的評価を尊重している。それは，例えば研究のスタート時点で実施された，読解力の育成に関する実態分析の緻密さに象徴されよう。そのような姿勢は，18年度のプログラム開発の営み，そこにおけるプログラムの評価・改善と性格を同じくしている。

また，同校の教師たちは，前述した地域のサークルにおける報告に加えて，例えば管理職が教育委員会に環境整備が進んでいないことの問題点を訴える，リーダーとなる教師が論文を執筆して研究成果を公開する等，様々な機会と手段で，実践研究の成果等を公表し，アピールしている。それが，普及に資するのはもちろん，同時に，学校の取り組みを自己点検・評価する機会になっていることは，予想に難くない。

（３）ケース３：研究のための組織構成やパートナーシップの確立（K中学校）

K中学校は，大都市近郊に位置する，中規模の学校である（16学級，30名弱の教職員)。地域の学校はいずれも，情報機器環境が整備されており，この学校は，そうした条件を生かすべく，これまでにも，情報教育の推進や校務の情報化等，教育の情報化に対応する取り組みに先進的に取り組んできた。

同校を，９月に訪問し，教頭，教務主任等のスタッフに対してインタビューを実施した。

①18年度の研究の概要

K中学校の教師たちは，以前から,「校内LANの整備」「ネットワークを介した生徒情報の共有」「保護者に対する学校情報の公開」などに着手してきた。その成果を踏まえて，18 年度は，ICT を活かした「見える化」＝学校の教育活動にまつわる様々な情報の電子化・ネットワーク化，それによる学校経営や教育活動の改善を試みた。

校長以下４名のプロジェクトチームが企業見学に出かけて,「見える化」の取り組みを学習

したり，「見える化」のためのソフトウェア開発を担当する会社と協議したりした。
生徒たちを委員会活動等における「見える化」の取り組みに従事させていった。例えば，「ごみの分別化」に関する各クラスの取り組みデータが校内 LAN 上で得点化して示されると，きわめて短期間に改善が図られたそうである。

②19 年度の研究活動

平成 19 年度，K 中学校の教師たちは，校内 LAN のさらなる活用にチャレンジしている。具体的には，教師間の情報交換を活性化するために，グループウェアを用いて，情報に「タグ」をつけることを始めていた。その結果，例えば，特定の曜日に学校を欠席している生徒が存在している等の事象に教師たちが気づくという効果が確認された。
タグが複雑すぎるという意見が出てきたので，それを踏まえて，プロジェクトのメンバーはタグのカテゴリーを修正しており，研究に関して形成的評価が機能していることも確認された。

③研究の継続・発展とその要因

上述したように，校内 LAN の活用を軸にして，同校の実践研究は，見事に継続・発展している。それには，次の２点が強く影響しているように思う。
１つは，**組織構成の巧みさ**である。コンセプトを作る段階ではプロジェクトチームが活躍するが，枠組みができると多くの教員が関われるように実行委員会を組織していくという流れが用意されている。それによって，リーダーシップが重層的に発揮されている。
もう１つは，**学校外組織，とりわけ企業との連携，パートナーシップの構築**である。これによって，システムの開発・修正や研修のインストラクター確保が実現している。

（４）ケース４：研究主任が発揮する実践的リーダーシップ（T 小学校）

T 小学校は，13 学級，20 名強の教職員から成る学校である。19 年 11 月に同校を訪問し，２つの授業を見学させてもらった。また，研究主任に， 18 年度の学校研究の成果や 19 年度の学校研究の取り組みについて，インタビューを実施した。

①18 年度の研究の概要

同校の教師たちは，18 年度に，ICT 活用，とりわけプロジェクターの活用を主柱に据え，学校研究を企画･運営した。その研究成果の主なものは，次のようにまとめることができる。

・すべての教室に，プロジェクターを配置した。また，校内 LAN が整備され，すべての教室でネットワークが使えるようになった。
・算数の学習における，ICT 活用のポイントが明確になった。例えば，「わかっていること」と「たずねられていること」をとらえさせる，そのために，「子どものノートをそのまま映しだし，考えさせる」ことが重要であると共通理解した。
・それらの指導場面を各実践者がデジカメで撮影し，サーバに保存した。70 以上の場面を集積できた。それらを整理して，小冊子「活用場面集」を作成した。
・１月に，ICT 活用に関する研究授業を３クラスで実施できた。他の学校の教師にも参加してもらった。
･教職員に ICT 活用による学力向上という意識が高まった。若い人に研究意欲が芽生えたし，年配の方にはチャレンジ精神が生まれた。

「活用場面集」の作成を主柱として，T 小学校の 18 年度の取り組みは，計画に基づいて展開され，当初想定した，あるいはそれ以上の成果を導き出したと言えよう。

②19 年度の研究活動

T 小学校の 19 年度の実践研究は，18 年度のものと直結しているわけではない。しかしながら，次のような形で，その連続・発展性を確認できた。

１）人権教育の研究構想図に情報教育を位置づける

この学校は，19 年度，人権教育の取り組みを研究テーマに据えている。したがって，18 年度の ICT 活用の取り組みは，「表看板」からは削除された。しかしながら，同校の教師たちは，ICT 活用やそれを含む情報教育は，人権教育を支えるものであると理解している。それは，19 年度の人権教育に関する研究構想図に，情報教育の取り組みが位置づけられていることに，明らかであろう。また，それに呼応して，同校の情報推進委員会が，その活動を停滞させることなく，例えば，実践の方針を打ち出したり，モラルの重点項目を作成したりしていたことにも，注目したい。

さらに，T 小学校は，訪問時から２週間後に，人権教育に関する取り組みを公開する研究発表会を催すことになっていた。教師たちは，そこで配布する実践記録を作成するために，１学期に全員が道徳等の指導案を作成し，授業実践を試み，記録していた。そして，この研究発表会で公開する授業では，昨年度の経験を活かして，何名かが ICT 活用による資料提示等を試みると聞いた。

２）他校で転出者が活躍している

平成 19 年４月に，18 年度の情報教育推進委員会のメンバーの大半が他校に異動した。ただし，彼らは，そこでリーダー格となって，情報教育の活性化に尽力している。

３）研究の発展のための整備計画が策定されている

同校は，ICT 活用の取り組みをさらに充実させるために，ICT 環境のさらなる整備も構想していた。それは，天吊り型のプロジェクターやプラズマディスプレイの購入である。研究主任によれば，そのよさを教師間で共通理解するために，一部の教室でもよいから，そうした環境を構築したいとのことであった。

③研究の継続・発展とその要因

T 小学校における実践研究の継続・発展に，多大なる影響を与えているのは，そこで**実践的リーダーシップを発揮する，研究主任の存在**である。

まず，彼は，研究に対して，とても積極的である。T 小学校は，19 年度も，残念ながら採択はされなかったが，松下教育研究財団の実践助成を申請した。その作業を担った彼は，「書くことで自分のやりたいことがはっきりする」と前向きに，助成申請の意義を筆者に語ってくれた。

同時に，彼は，研究を繰り広げる際に，同僚と共同的関係築くことを大切にしていた。例えば，若い教師の授業づくりの相談にのったり，彼らにアドバイスを与えたりしている。職員会議で研究に関連する資料等を配布したり，若い教師を地域の自主的な研究会に誘ったりもしている。

さらに注目すべきは，同僚の取り組みを支援するための具体的方策を，彼がいくつも有していることである。上述した「活用場面集」作成に向けて，ICT を活用している指導場面を各教師に記録してもらう際に，この研究主任は，自らが ICT を活用している場面をセルフタイマーを用いて撮影して，「こういうものを残してください」と同僚に示したそうである。そのモデルが功を奏し，多くの教師が撮影を成功裏に進められたという。

コラム⑤　異動したばかりの学校で実践研究推進のイニシアチブを果たす

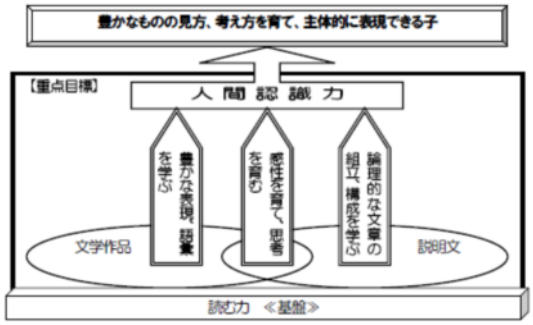
守口市立橋波小学校　松浦智史

私が現任校に転勤したのは，本校で国語の研究が始まって３年目の年でした。「豊かなものの見方，考え方を育て，主体的に表現できる子どもの育成をめざして～『わかる喜び』『学ぶ楽しさ』の中から生きる力を～」をテーマに据えて，研究が実施されることになっていました。

１年目は，学習の基礎となる国語の力（よむ・かく・はなす・きく）を身につけることで“わかる喜び”を実感させ，言語感覚や表現能力を養うことで子どもに「学ぶ楽しさ」を実感させるというねらいで，研究を進めたようでした。

２年目は，「自分の思いを伝えられる子に」という課題のもとに，自分の思いを認識するための要となる「書く力」の育成に重点を置き，作文指導等を中心に研究を進めたと聞きました。

３年目の19年度は，「読む力」を基盤に据え，子どもに深く考えさせ，また豊かに読み取らせることで，彼らの思いのもととなる内面を育てたい，その上で，子どもに人間の本質や生きる意味を学ばせて研究テーマに迫りたいと考えました。



そのための重点課題は，『文学教材，説明文教材を読み取らせることで，ものの見方考え方を育て，人間認識の力をつける』とし，①感性を育て自分の思いを深める②豊かな表現，語彙を学ぶ③論理的な文章の組立や物語の構成について学ぶ，と決定しました。しかし，研究テーマや重点課題が複雑なので，研究構想図を作成して，研究の枠組みを共通理解しやすいようにしましょうと，働きかけました。また，図示することで，「人間認識力」とは何か，それぞれの単元で授業の柱を何にするのか等の話し合いが年度当初にできたことはよかったと思います。

年度末に作成する研究冊子では，今までのものにはなかった「成果と課題」を載せることができました。本来なら，毎年「成果と課題」を載せるべきですが，本校では，その発想が希薄で，これを形にするのは簡単ではありませんでした。けれども，研究主任に執筆をお願いして，なんとか，これが実現しました。このように，研究冊子の位置づけに関して議論ができたことも，成果だったと考えます

研究冊子を作成するにあたっては，12月に原稿執筆プランを配布しました。冬休みを利用して執筆してもらうためです。1月末を提出締め切りに定めましたが，やはり遅れる人も出てきたので，早めの締め切りを提案したことは功を奏したと思います。

年間を通しての研究授業（国語で５本）とそれらに関する事後協議会では，あまりイニシアチブを発揮することができませんでした。その改善が今後の課題です。例えば，授業評価用シートを協議会で上手く活用することができず，書いただけに留まってしまっていました。その有効利用を同僚に提案してみたいと思っています。

４．学校研究「継続・発展」の評価基準－松下教育研究財団の実践研究助成校の場合－

大阪教育大学　木原俊行

以下の表は，学校研究の「継続・発展」を点検・評価するための基準表である。松下教育研究財団の実践研究助成校における学校研究の場合を想定して，作成した。表１は，助成期間中に試みるべき継続・発展のための布石である。そして表２は，助成期間終了後に起こすべき，継続・発展に必要とされるアクションである。

表１　学校研究の評価基準（助成期間中の継続・発展への布石）

項目	レベル１	レベル２	レベル３
	努力を要する	おおむね満足できる	十分満足できる
１．研究計画の具体化	授業研究の日程等が明らかになっていない	授業研究の日程等が明らかになっている	翌年度の計画等もある程度構想し，計画が重層的になっている
２．実践のスタート	１学期に，計画に基づいた実践が生まれない	１学期中に，計画に基づいた実践がいくつか試みられる	１学期中に計画に基づいた実践が試みられ，それらを教師間で共有する仕組みも開発されている
３．研究授業の実施	一部の教師しか研究授業を実施していない	多くの教科や学年で授業研究が試みられている	複数の研究授業の知見を比較検討する仕組みを整えている
４．研究授業の事後協議会の企画・運営	意見交換が盛んでない，あるいは一部の教師等に限られている	数多くの意見が出され，それが整理されている	観察者自身の授業改善を考察する機会が設けられている
５．外部評価の導入	外部評価の取り組みが皆無である	他校の教師等が授業研究会に参加できる	授業公開を含む研究発表会を開催している
６．研究の評価	研究の視点と方法を評価する機会や仕組みが設けられていない	研究を総括する機会が年度末に設けられている	年度末以外（例えば夏休み）にも研究を評価する機会がある
７．報告書等の作成	ごく一部の教師で作成されている	複数の教師によって作成されている	学校独自で研究紀要等を作成し，報告書が，その要約版となっている
８．次なる実践的リーダーの育成	次年度以降に研究をリードする人材が見定められていない	若い教師に研究推進グループにあえて参加してもらっている	次の実践的リーダーたる人材に意図的に重要な役割を果たしてもらう

表２　学校研究の評価基準（助成期間終了後の継続・発展のアクション）

項目	レベル１	レベル２	レベル３
	努力を要する	おおむね満足できる	十分満足できる
１．研究テーマの再構成	前年度のテーマと今年度のものがなんらつながっていない	育成を図る学力等にテーマの連続性を確認できる	テーマの連続･発展性が根拠をもって示されている
２．研究組織の再構築	研究組織がなんら変わっていない（安易に変えられている）	研究組織が部分的に変わっている	研究組織の構造化が進展している
３．実践の維持・継承	昨年度の実践が試みられていない	昨年度の実践の取り組み数が増えている	昨年度の実践のバージョンアップが進んでいる
４．学校外への普及	昨年度の実践を他校等へ普及しようとする意思が見あたらない	論文執筆やホームページでの紹介などに着手している	地域の研究会等で成果を報告したり，成果物を配布したりしている
５.報告会(8月)における報告内容	報告書の執筆内容に限定されている	報告書の執筆内容に，助成期間中の他の取り組みを加えてレポートしている	助成期間中の取り組みと助成終了後の取り組みを統合的にレポートしている
６．さらなる申請	実践研究助成へのさらなる申請を検討していない	実践研究助成へのさらなる申請を検討している	様々な助成への申請を複眼的に検討している